

〔論文〕

幼児期における「振り返り」活動

—幼小接続期におけるメタ認知に関する一考察—

太田友子
Tomoko Ota

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻

メタ認知とは「認知についての認知」であるが、次期小学校学習指導要領において育成すべき資質・能力の一つにメタ認知が示されていると考えられ、いかに育成するかが重要な課題となっている。

本論文では、幼小接続期の教育の連続性・一貫性についての知見を得るため、小学校以降の学習で行われている「振り返り」活動について、幼稚園児に対し、「振り返り」活動を行う時間を設け、そこでの幼児の発言を対象にエピソード分析を行った。その結果、幼児期におけるメタ認知の芽生えを捉えるとともに、メタ認知を促進する教師との対話や協同的な活動の重要性を見出すことができた。

キーワード：メタ認知、「振り返り」活動、心の理論、教師との対話、協同的な活動、幼小接続期

I はじめに

1 問題設定

メタ認知とは「認知についての認知」である。メタ認知は、2013年に国立教育政策研究所教育課程研究センターがまとめた「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」(教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5)では、今後の教育課程編成で育成が求められる資質・能力として「21世紀型能力」が提唱され、その中核を成す「思考力」に位置づけられている。

現行の小学校学習指導要領(総則)においては、教科等の学習活動に、見通しを立てたり、振り返ったりする場を計画的に設けることが示されており、メタ認知を育成することが示されている。

ところで、「メタ認知」は、小学校以降の教育にだけ関係するキーワードなのであろうか。子どもの発達や学びの連続性から、これからの教育を捉えようとしたとき、幼児期における「メタ認知」は、どのような発達段階にあるのかという疑問が当然生じてくるのである。

幼児期の教育においては、生涯にわたる人格形成の基礎を培うとともに、学びの基礎となる資質・能力を育むことが求められており、課題の一つとして小学校教育との円滑な接続、「連続性・一貫性」のある教育が挙げられている。

そこで、本論文においては、小学校以降で重視されているメタ認知をキーワードに、「振り返り」活動のエピソード分析から、幼児期におけるメタ認知の発達やメタ

認知を促進する教師の役割について考察していくことにする。

2 幼児期におけるメタ認知と接続期の資質・能力

ここで、幼児期の教育と小学校教育との関係について整理しておきたい。教育基本法第11条において「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と記されている。また、学校教育法第22条において、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの」とされ、幼児期の教育が学校教育全体の生活や学習の基礎を培う役割を担っていることが示されている。

また、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(2010年11月)によると、幼児期と児童期の教育については、それぞれの段階における役割と責任を果たすとともに、両者の教育が円滑に接続して、教育の連続性や一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的に進められるよう、相互に留意する旨が示されている。

教育の連続性や一貫性の確保という観点からメタ認知の育成を捉えたとき、幼児期、とりわけ幼小の接続期においてどのように教師が関わればよいのかも、課題として浮かび上がってくるのである。

メタ認知をキーワードに、その育ちの姿や育ちを促進するための指導について探ることは、接続期における教育の連続性や一貫性、さらに学びの自覚化という今日的な課題についても知見を得ることになると考えられる。

3 メタ認知に関する先行研究

(1) メタ認知

メタ認知の概念が心理学の中に現れたのは1970年代であるが、その定義や構成要素についての見解は必ずしも統一されていない。また、メタ認知の研究は多様な領域（例：発達心理学、教育心理学、社会心理学、認知科学、神経心理学、脳科学など）に広がっている。そんな中、教育に関する動きとしては、1980年代に入り、学習科学においても問題解決に関する研究が盛んになり、メタ認知が心理学の研究対象から算数・数学教育の研究対象にもなってきた。

さて、「メタ認知」という用語は、心理学者フラベル（John H.Flavell, 1928-）が1970年代に初めて用いたものであり、メタ認知とは、広義には、「認知についての認知」、「考えることについて考える」と定義されるが、それは大きく分けて二つの側面から成る。「メタ認知的知識」と「メタ認知的技能」である。

一つ目の「メタ認知的知識」とは、認知作用の状態を判断するために蓄えられた、課題、自己、方略についての知識・情報を指す。二つ目の「メタ認知的技能」とは、メタ認知的知識に照らして認知作用を直接的に調整するモニタリング、自己評価、コントロールの技能を指している。二つ目の「メタ認知的技能」については、フラベル（1987）は「メタ認知的経験」とも呼び、またブラウン（Ann Leslie Brown, 1943-1999）（1987）は、「認知の調整」と呼んでいる（三宮, 2008）。

三宮（2008）は「メタ認知的技能」をできるだけ広く捉え、より積極的な意味合いをもつことを意図して、「メタ認知的活動」という語を用いている（図1）。

本論文では、幼児期におけるメタ認知の発達を探ることを目的としており、三宮（2008）の言う「できるだけ

広く捉えて、振り返り活動を考察する」ため、二つ目の「メタ認知的技能」を「メタ認知的活動」として、エピソード分析を行うことにする。

三宮は、「とりわけ学習において、メタ認知は極めて重要な役割を果たしている。」とし、「学習者のメタ認知を育むことは、非常に効果的な学習支援になり得る。」としているが、ここで注目すべきことは、「メタ認知を育む」ということは、単に学習法を教えるといったことに限らず、学習に対する基本的な姿勢や考え方、感じ方、動機付けなどに働きかけることにつながる。その結果、学習者が自分の意志と判断によって学習に積極的に関わる、自律的な学習者となることを可能とする。」と述べていることである。驚くべきことに、三宮は、先述した「21世紀型能力」（2015）を予見したかのように、メタ認知を育む目的を見据えている。筆者も、幼児期におけるメタ認知の発達を考察する際にも、広い目的をもって向き合おうと考えている。

本論文においても、幼児期におけるメタ認知の発達を考察する際、どのような文脈の中で生じた話しことばや身振り、表情などであるかは重要な視点となる。幼児期によく見られる「えーと」「うーん」などを、丸野（2008）の言う「メタ認知的発話」として受け止め、積極的に解釈していく。

重松（2008）は、日本の算数・数学教育において初めてメタ認知研究が始まった1985年からメタ認知を育成する方策について研究している。その中で、メタ認知的な活動を捉えるのは困難な要因が多く、インタビューや質問紙、発話思考、行動観察など、メタ認知的活動の状況の測定のための方法論やデータ分析については、今後の課題の一つであるとしつつ、重松は、子どもの算数作文を活用して、子どもに「メタ認知」を意識させたり、育成したりして、医学で言えば、対処療法的な治療ではなく、体質改善的な治療のような、児童の内的な学力改善の方法や実践事例を報告している。

その中で、まず、メタ認知の活動状況を捉えるため、メタ認知の働きをモデル化（図2）して、児童のメタ認知の働きの変容を捉えようとしている。

そこで、本論文においても、日常の学習（生活）場面での幼児期のメタ認知の姿を捉えるために、このメタ認知モデルを一部修正（メタ認知的技能をメタ認知的活動とする）し、エピソード分析の際に用いることにする（図2）。

メタ認知に関する研究は、これまで、主たる対象者は小学生以上であり、一般的には、幼児期はまだメタ認知を獲得していない時期であり、したがってメタ認知の発達を促すような教育的介入は効果がないと推測されてきた。

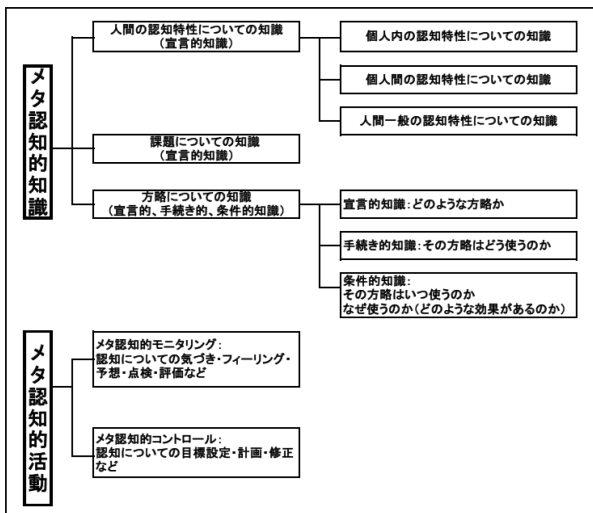


図1 メタ認知の分類（三宮 2008）

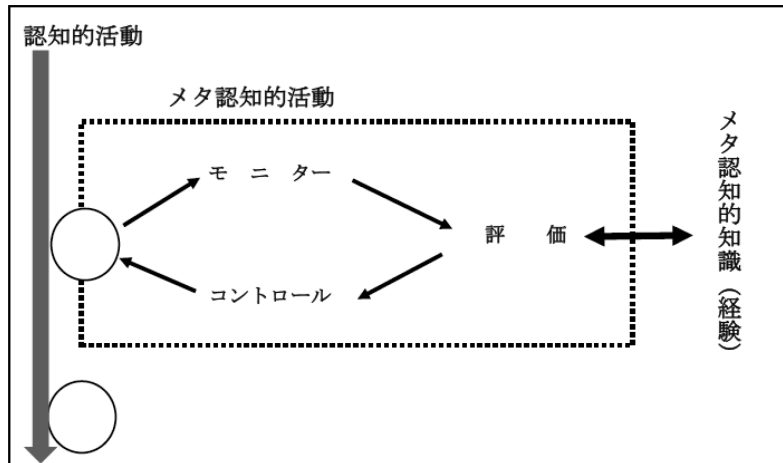


図2 メタ認知モデル (重松のモデル図を一部変更 太田友子)

(2) 幼児期におけるメタ認知的機能の芽生え

幼児期におけるメタ認知の発達については、ことばの発達など様々な能力等の発達との関連が考えられる (図3)。まず、ことばの発達では、相手や文脈に支えられた関係の中で、自分の思いを伝えたり、表したりする話しことば、いわゆる「一次的事ことば」を獲得し (岡本, 1985)、ことばは多様な役割をもつと言われるが、記憶をとめる「ピン」の役割や知識を引き出す「つり糸」の役割、さらにイメージに形を与える「彫刻刀」の役割をもつ (内田, 2014) という。これらのことばの役割を駆使して、認知の発達では、「原因があって結果」という時系列因果関係から、時間概念ができ上がる5歳後半頃から

見られる「結果から原因」へと逆順方略ができるようになる、いわゆる第二次認知革命が起きる (内田, 2014)。メタ認知における「振り返り」は、現在から過去を対象に逆順方略を用いることになり、この第二次認知革命は重要なポイントとなる。さらに、メタ認知的知識を用いて類推を働かせ、結果から原因を探る。次に、未来への見通しをも見出すというメタ認知的活動のモニタリングやコントロールが展開されることにもつながる。

心の理論は、自分とは違う他者の信念を理解できるようになることであるが、他者との比較により自分を明確に意識することと言える (Premack & Woodruff, 1978)。また、過去の自分の信念と今の自分の信念との変化も捉

乳 幼 児 期 ・ 児 童 期										
1 歳					幼 小 接 続 期					
2 歳		3 歳		4 歳		5 歳		6 歳 7 歳 8 歳 9 歳		
* 見通しと振り返りを活用した学習の始まり										
メタ認知					* メタ認知的知識 (経験) の蓄積		* メタ認知的活動 (モニター・コントロール) の表出			
					* メタ認知的知識 (感情) の表出					
振り返り	対象の変化		～ 振り返りの広がり・深まり ～							
時間軸			* 直前・今日		～		これまで・これから			
内容			* 情意面 + 認知面				+ 想像・創造面			
			* 自分 他者				自分を含む集団			
by 太田友子										
心の理論	知識についての理解が変わる			他者と自分との違いを意識する			過去の自分の変容の理解			
* 「過去の自分の信念」の理解										
by Premack & Woodruff										
認知発達	第一次認知革命		イメージ (表象) の誕生		第二次認知革命					
枠組み	(後ろから前への推論) (結果→原因)				* (前から後ろへの推論) (原因→結果)		+ 未来			
	現在 + 過去									
by 内田伸子										
ことばと思考					一次的事ことば				* 二次的事ことば	
					相手や文脈に支えられて				書きことばとして思考を表出	
					話しことばで思考を表出				内言 (思考のための)	
					外言 (表現、伝達のための)					
by 岡本夏木										

図3 幼児期におけるメタ認知に関する能力等

えられるようになり、このことは、メタ認知的知識の変数の一つである「人」に当てはめると、例えば、「以前はできないと思っていた自分であるが、今は練習するとできている。」のように自己の成長に気づき、メタ認知が促進されることに結びつくと言える。

このように、ことば、認知、心の理論の発達との関連から、メタ認知の発達が促進され、振り返りの内容に広がりや深まりが表出され始めると考えられる。

その様相は、まず、3歳児では、直近の事柄についての振り返りから始まり、「嬉しかった」「楽しかった」「面白かった」など自分の感情を伴った内容から表出されだす。

次に、4歳児では、メタ認知的知識の「人」である、「自分は縄跳びが上手くできない。」から「Aちゃんは縄跳びが上手だ。」のように他者の存在が生じてくる。他児の話に耳をそばだてて聴くようになる時期でもあり、ことばによる「つり糸」の役割を駆使して、メタ認知的知識が蓄積されていく。また、情意面では「悔しかった」「残念だった」のようにマイナス面が意識され出し、「だから今度は～したい」と次への意欲喚起へとつながる姿が見られるようになる。

やがて、5歳児になると、これまで蓄積したメタ認知的知識を駆使してモニタリングしたり、コントロールしたりし始める。例えば、劇遊びの中で「大きな声や動作が大事である」「豊かな表情は大切である」などのメタ認知的知識を獲得した園児は、劇遊びの本番中に「大きな声が出ているか」とモニタリングし、「大きな声を出すとお客さんによく聞こえる」というメタ認知的知識の「課題」や「方略」を使って、「ここはもっと大きな声を出す場面だ」とコントロールするようになる。また、その行為そのものを自覚して振り返ることができるのである。

藤谷(2011)は、「近年、幼児期には児童期に獲得するようなメタ認知そのものではないが、本物のメタ認知の前兆・前駆(a precursor to the real thing)あるいは原初型としてのメタ認知(proto-metacognition)を発達させている(Larkin, 2010)という考え方も広まりつつあり、この考え方は、幼児期のメタ認知は、欠損モデルから成長モデルへの転換を意味すると考えられる。」と述べている。

板倉(2008)によると、幼児は、就学前、基本的な心的過程を区別することを学び始めるが、いわゆる学習に直接的に役立つような種類のメタ認知の発達としては十分ではないものの、基本的な心についての理解をもっているという、メタ認知の原初的な在り方が示されている。

内田(2008)は、文章産出過程においてメタ認知はどのような役割を果たすのかについて、子どもの遊びや語

りに焦点を当てて考察しているが、「4歳頃から自己自身の認知を意識化するようになる。やがて、5歳半頃に【第二次認知革命】により、行動プランを持ち始め、意識の時間軸は確実に未来へと広がる。このプランに照らして自分の行為をモニターしたり、評価したりするようになる。つまり、自己の中にもう一人の自己をすまわせ、自分の中に他者の目、メタ認知機能をもつことができるようになるのである。」と述べている。

本論文も、幼児期におけるメタ認知の初期の形態を見取ってこうとする立場にあり、本論文で取り上げる幼児期(3・4・5歳児)の「振り返り」活動のエピソードの中に、メタ認知機能の芽生えの出現が期待できると考えている。

(3) メタ認知を育てるための教師の役割

本論文では、幼児期のメタ認知については、もたざるものからもてるものへの発達として捉えるのではなく、未熟な状態から高度な状態への連続的な発達として捉える立場に立っている。ここで重要な鍵を握るのは教師の関わりである。

そこで、社会・文化の影響を重視し、ことばを思考の道具と見なして、学校教育に対する多くの示唆を含むヴィゴツキー(Lev. Semenovich Vygotsky, 1896-1934)の認知発達理論を取り上げる。教育の重要な役割として、認知の他者調整(other-regulation)から自己調整(self-regulation)への移行を促すことが挙げられる。年長者(教師)とのことばのやりとり(対話)による認知の他者調整(外言)から内言(inner-speech)による自己調整へと移行することに着目する。幼児期におけるメタ認知を検討する際にも、年長者(教師)の関わりは重要であり、対話を通して得られる支援を「足場作り(scaffolding)」と呼ぶが、これが次第に内面化されて自己内対話による問題解決が行われるようになって考えている。すなわち、年長者(教師)との対話を通して得られる支援の足場作りを、幼児はメタ認知的知識として獲得し、やがて、それを内面化して使い、メタ認知的活動(モニタリング・コントロール)する段階に至ると考えられる。「振り返り」活動の変容(図4)が見られるのである。本論文でのエピソードにもその姿が見取れるので、後に詳細に述べることにする。一方、幼児期のメタ認知については、ことばの発達との関連も強く、発達段階や個人差の影響が大きいことが想定されている。

(4) 「振り返り」活動とメタ認知の関係

「メタ認知」は、心的機能を表す心理学用語である。「振り返り」は「省察」とともにreflectionの訳語として用

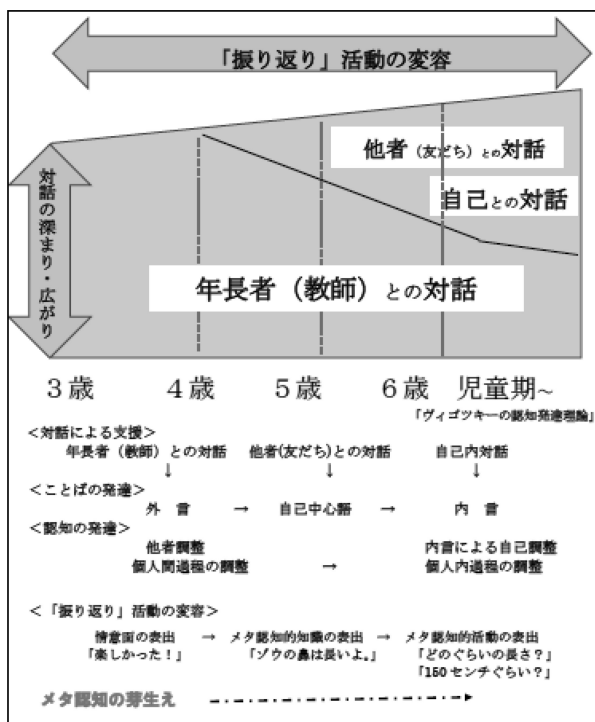


図4 「振り返り」活動の変容

いられている。したがって、「振り返り」は単なる想起する行為ではなく、メタ認知を働かせる、すなわちメタ認知的知識を使ってモニタリングしたりコントロールしたりするメタ認知的活動そのものと言える。一方、本論文における「振り返り」活動とは、学習活動の中に意図的に「振り返り」の場を設け、メタ認知を促すことを目的としている学習活動である。本来、メタ認知は学習過程の随所で働かせるものであるが、例えば、日常生活の中でメタ認知を意識する場面はさほど多くないことは否めないであろう。いったん、立ち止まって吟味する必要があるときに、メタ認知を働かせていることを自覚するのではなかろうか。ゆえに、いったん立ち止まって、意図的に「振り返り」活動を取り入れるのである。

先述したとおり、現行の小学校学習指導要領（総則）において、「各教科等の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫すること」と示されているが、そのねらいは、児童の学習意欲の向上とともに、学習内容の確実な定着を図り、思考力・判断力・表現力等の育成に資するために取り入れるものと考えられている。はじめは、学習を想起するにとどまる段階から、「どのようにして考えたか」「どの方法がよりよいのか」などの視点で振り返るようになり、やがては、学習過程の随所でメタ認知を働かせるようになることをねらいとしている。

したがって、メタ認知をいかに育てるかという視点に

立つとき、学習活動の在り方が課題となってくるのである。

太田（2013）は、算数学習の中で「振り返り」活動を取り入れた実践研究をしたが、小学1年生においても、メタ認知の育ちが見られている（下-作文）。

これらのことから、幼児期後半（5歳児）には、ある程度、「振り返り」活動ができ、メタ認知の芽生えが見られるのではないかと想定している（図4）。

II 研究目的と方法

1 研究の目的

本論文では、幼児期におけるメタ認知の発達について、小学校以降の素地として、幼児期にどのように表出してくるのかを、幼稚園児（3・4・5歳児）の「振り返り」活動のエピソード分析から探ることとする。また、幼児期において、メタ認知の発達を促進するには、どのような教師の関わりが重要であるのか、さらにどのような活動の場が適しているのかについても探り、幼小接続期における教育の在り方について知見を得ることとする。

2 研究の方法

予備調査により仮説を導き、本調査により仮説を実証し、研究の目的を明らかにする。

<調査の概要>

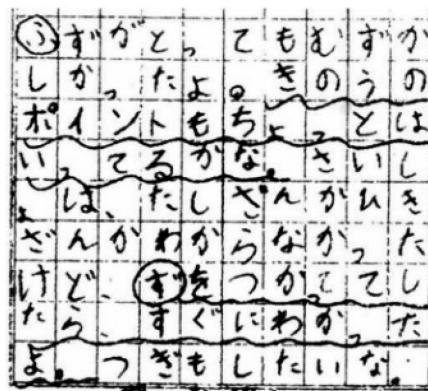
予備調査：遠足（動物園）の体験についての「振り返り」活動（3・4・5歳児）。

表現力、協同性との関連から、分析・考察する。

本調査：生活発表会の体験についての「振り返り」活動（3・4・5歳児）。

メタ認知モデル図を用いて、仮説を分析・考察する。

小学1年生の算数の「振り返り」活動



堺市立深井小学校研究集録（2013）より

Ⅲ 研究の内容

1 予備調査

(1) 目的

幼稚園児（3・4・5歳児）の「振り返り」活動のエピソードと教師の関わりを通して、メタ認知能力の芽生えを考察する。

(2) 方法

① フィールドの概要と対象者

フィールドとした幼稚園は、大阪市内にある3年保育を実施している地域の子どもたちが通う幼稚園である。保育内容は幼稚園教育要領の内容に準じており、保育の特徴としては、総合的な指導を通して、「からだ」「ことば」「こころ」の三つの力をバランスよく育成することを大切にしている。生活発表会、作品展など豊かな表現力を育成する保育にも力を入れている。

<対象者>

3歳児：3クラス（57人） 4歳児：2クラス（57人） 5歳児：3クラス（63人）

② 観察期間

2015年9月から2016年3月までの6ヶ月間。基本的には、登園午前9時から降園午後2時までの保育時間である。振り返りは週1、2回程度実施した。

予備調査：10月実施 本調査：2月実施

③ 筆者とエピソードの関係

ここで、筆者とエピソードの関係を整理しておく。日常の園生活の中で、教師が意図的に「振り返り」活動の場を設け、園児の発言等について、歳児ごとに担任がビデオ録画やノート記録をもとに記録した。その際、担任の感想も共有しながら、筆者が解釈を行った（図5）。

④ データ収集法

教師の振り返りと筆者の観察による二つのデータは次

のような手順で収集した。

1) 記録方法

記録は、幼児と教師のやりとりをことばや行動、表情などその場でフィールドメモし、また動画録画を行い、その日のうちにノートにまとめた。

2) 教師の記録について

教師が「振り返り」活動のビデオ録画等をもとにノートメモを作成する。それをもとに筆者と教師と確認しながら解釈（分析・考察）を行った。また、歳児ごとの考察についてすべての教師と再度考察について吟味を行った。

(3) 予備調査の結果と考察

10月の園外保育として天王寺動物園へ全園児が参加した。この体験をもとに、土日を含んだ月曜日に「振り返り」活動の場を各歳児で設けた。

観察力や表現力、協同性の歳児別の違いを捉えることをねらいとした。主要な発問は次の3問である。「遠足はどうでしたか」「何が楽しかったですか」「ゾウはどんな様子でしたか」。

① 表現力について

3歳児は、ことばで表現しようとする、「えーと」「えーと」と悩むことがある。教師が「体を使ってもいいよ」と促すと、「こんなん!」と言いながら全身を使って、ゾウの鼻を表現する。この期はことばの発達が十分でないので、身体表現を用いると振り返ることができるが、動物の名前が出る程度の振り返りである。

4歳児においては、ことばで表現する力が伸びる。「ライオンがガオーというのが楽しかった。」「ゾウさんのウンチが出るのがすごかった。」と具体的に思い出しながら振り返ることができるようになる。ライオンの鳴き声やウンチの出る様子などで記憶力が伸び、振り返りの内容に広がりが出始めている。

5歳児では、「ペンギンの泳いでいるところが速くてすごかった。」「ゾウの耳がべろんとなっていて、大きかったのが可愛かった。」と、さらに表現力が豊かになることが見て取れる。5歳児では、「ゾウの鼻が長かった。」という発言に対し、他児が「何センチかな?」さらに「100センチ!」「いや、150センチくらいあるんちゃう?」などと補足し合いながら、量感覚や数を使って振り返る力が育っていることも見て取れる。

② 協同性について

メタ認知を促進するには、他者の振り返りから学ぶことも効果的である。3歳児は、自分の思いを表現することそのものを楽しむ段階であるが、4歳児になると少しも違うことを発言しようとして、他児の発言をよく聞

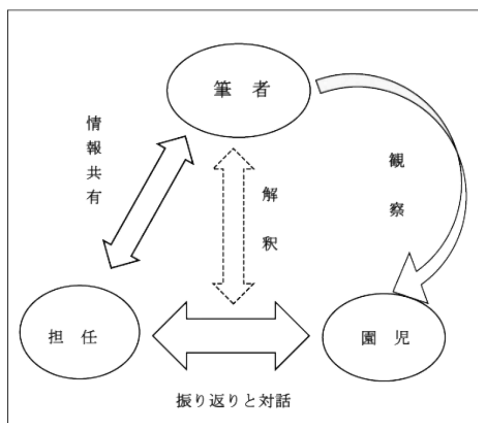


図5 筆者とエピソードの関係

くようになる。5歳児になると、上述のように、他児の発言に補足したり質問したりするような振り返りをするのが見て取れる。協同的な場面は振り返りに広がりや深まりをもたらすことが分かる。

③ 教師の関わり（発問）について

「どうだった？」という教師の発問は漠然としているため、3・4歳児には「楽しかった」「面白かった」という情意面との関連から振り返りは見られるが、その内容に広がりや深まりが見られにくい。5歳児になると、教師の関わり（発問）を取り入れて自ら「何」が「どのように」「楽しかった」を加えて振り返る力が育っていることが見て取れる。教師の関わり（発問）が振り返りを促すために重要な役割を担うことが分かる。

④ 歳児別の「振り返り」活動（表1）

以上のことから、3歳児においては、振り返る対象は直近の体験であり、情意面を伴って振り返ることが主で、メタ認知の芽生えとして捉えるには難しい段階である。

また、この「えーと」や「あー」という発話であるが、丸野（2008）は「メタ認知的発話」と呼び、「内なる声や心の葛藤」の表明として、思考の明確化を図る機能があると述べているが、3歳児の段階では、ゾウの様子を伝えようと「えーと」「えーと」の発話の後で「こんなん」といいながら身体表現する姿があった。このように教師との対話という文脈の中で立ち現れてくるものであり、モニタリングしているかどうかについては、慎重に見取っていく必要があると考えている。

4歳児は、数日前の体験を振り返り、自分だけでなく友だちのことに目も向け出す。振り返りの内容に広がりや深まりが見られ出し、メタ認知としてのモニタリン

グは見られ出すが、コントロールについては見取りが困難な状態にある。

5歳児になると、前述に加え、協同性が加わり、これまでの教師の言語支援（例：それでどうなったの？）を受けて、子ども同士で行うようになる姿がある。振り返りの内容がさらに広がりや深まりが見られ出し、メタ認知的知識が増えて、ようやくメタ認知的活動のモニタリングやコントロールの姿が見取れるようになる。

2 仮説

先行研究の検討並びに予備調査により、幼児期におけるメタ認知の発達について、次のような仮説（表2）を構築した。

3 本調査

仮説（表2）を実証するため、予備調査を実施したフィールドの幼稚園での生活発表会において、本調査として「振り返り」活動のエピソード分析を行う。

生活発表会は、子どもたちが工夫を凝らしながら創り上げてきた表現遊びの発表の場である。3歳児から発表会に取り組んできているので、「4歳になったら」「5歳になったら」と憧れや期待、見通しをもって取り組む活動となっている。子どもたちの創意工夫を生かし主体性を存分に発揮できるよう、発表までのプロセスで、「振り返り」活動を取り入れ、話し合いを大切にしている。活動内容は、劇、オペレッタ、日本舞踊、太鼓、落語、合奏などから子どもたちが選択し、子どもたちが創り上げる協同的な活動として位置づけている。

表1 予備調査（歳児別の振り返り「活動」）

	3歳児	4歳児	5歳児
表現力	ことば < 身体表現	ことば + 身体表現	ことば > 身体表現
観察力	「ゾウがいたよ」 「えーと」「えーと」 「こんなん」(身体表現) 「楽しかった」	「ゾウのウンチが出るのがすごかった」 「ライオンがガオーというのが楽しかった」	「ゾウの鼻が長かった」 「何センチかな？」 「100センチ」 「もっと長いよ。150センチぐらいあるんちゃう？」
協同性	自己表現を楽しむが、他児の発言や表現を真似る姿が見られる。	他児と違う発言しようとして、他児の発言をよく聴く姿が見られる。	他児の発言に質問したり補足したりする姿が見られる。
教師の関わり（発問）と「振り返り」活動	教師との対話により、身体表現を使いながら「楽しかった」などの情意面を伴った振り返りが見られるが、個人差が大きい。	表現力が伸び、他児の振り返りを意識した振り返りが見られる。振り返りを話し合う協同的な場面が重要であることがわかる。	表現力に協同性が加わり、教師の発問（言語支援）「それでどうなったの？」を受けて、子どもたち同士で振り返りを深める姿が見られる。

表2 仮説（幼児期におけるメタ認知の発達）

「振り返り」活動					
歳児	メタ認知的知識			メタ認知的活動	
	人	時間的対象	情意面	モニタリング	コントロール
3	自分	直近のこと	楽しかった	…	—
4	自分 他者	数日の前後	楽しかった	△	…
5	自分 他者	十数日の前後	楽しかった	○	△

* 注釈 「—」：全く見とれない状態
「…」：教師との対話によりやや見取れる状態
「△」：教師との対話により見取れる状態
「○」：教師との対話や協同性により見取れる状態

(1) 本調査の結果と考察：5歳児（エピソード1、2、表3）

予行時の「振り返り」活動のエピソードからメタ認知の発達について考察する。さらに焦点児を設け、予行と本番後の振り返りの関連性を探り、メタ認知のどの側面が見られるかについても考察を加えることにする。

まず、予行後の「振り返り」活動を次の4つの観点から考察する。

① 予行場面の理解

これは、メタ認知的知識のカテゴリーの一つ「課題についての知識」に当たる。ここでは、本番のための予行場面であること、園児からすると「本気にちかい練習」となることを理解しているかである。「お客さん」を意識しているかということもここに当てはまる。5歳児では、予行場面であるという課題を意識できることが見て取れる。月齢の低い園児（C9児）でも、この4つの観点は生じている。

② 次への見通し

メタ認知的活動は、モニタリングやコントロール、自己評価の三つから成る。ここではメタ認知的知識の「方略」を使って、モニタリングし、「最初の傘を回すところが難しい（C10児。）」「（劇で）早く出てくるところ（この日自分の出番で出遅れた）を次はがんばります（C4児。）」など、次への見通し（解決すべき課題）を見出している。振り返りは振り返りで終わるのではなく、次に何をどうするかという課題を見出し、見通しをもつことが重要である。

③ 意欲喚起（自己肯定感）

意欲喚起は、メタ認知的知識のカテゴリーの「人」に含まれる。「明日もがんばりたい（C5児。）」と思う自分の信念を獲得している。「自分ってすごいと思った（C1児。）」「めっちゃ、がんばろうと思います（C7児。）」など、情意面がよく表出されている。振り返りは意欲を喚起し、前向きに生活発表会に取り組もうとする園児の

表3 5歳児（生活発表会 予行後「振り返り」活動）

評価項目		予行を意識する	課題を見出す	意欲を喚起する	他児のがんばりを見出す	
園児	年齢	①	②	③	④	
C1	6歳2ヶ月	お客さんに	すごいところを見てもらう	自分はすごい	猫が出てくるところが面白い	
F児	6歳5ヶ月	お客さんに	上手に見せたい	自分はすごい		*
S児	6歳5ヶ月	お客さんに	見てもらう	嬉しい明日もがんばる	スイミー 隠れ蓑	*
C2	6歳2ヶ月	お客さんに	よいところを見てもらう	明日もがんばる		
C3	6歳7ヶ月	予行	踊り 歌をがんばる	がんばった（過去）	狸が燃やされる場所	
C4	6歳10ヶ月	予行	出る順番を遅れない	がんばります		
C5	6歳8ヶ月	予行	大きな声を出す	本番もがんばる		
C6	6歳6ヶ月	予行	すてきな踊りを見せたい	本番もこの調子		
C7	6歳10ヶ月	大勢お客さん	大勢のお客さんに見せる	めっちゃがんばる	お返しをしたところ	
C8	6歳6ヶ月	（本番も）	ドドンガドン	がんばる		
O児	6歳7ヶ月	本番も	今日いっぱいできた	本番もがんばる	残念な表情がよくできている	*
C9	6歳	（本番も）	はじめのシロフォン	がんばります	スイミーの最後、想像できた	
C10	6歳3ヶ月	（本番も）	傘を回すところ	またがんばってみる	盗んだところ面白かった	

* 焦点児

エピソード1：5歳児（生活発表会 予行後の「振り返り」）活動

<p>○結果(子どもたちの反応など)※子どもが話した順に記録。</p> <p>① クラスの劇や、グループでの発表について、それぞれ感じたことやがんばったこと。</p> <p>C1 「劇でいろんなお客さんにすごいとを見てもらって、自分はすごいと思いました。」</p> <p>F児 「お客さんに見てもらって、演技が上手と言ってくれたからがんばって、自分がすごかったと思いました。」</p> <p>S児 「今日、いつもやってる美女と野獣で、劇でお客さんに見てもらって嬉しいと思います。明日もがんばりたいと思います。」</p> <p>C2 「予行で、お客さんに良い所を見てもらって、自分も明日ががんばりたいと思いました。」</p> <p>C3 「予行の時、踊りの所(パティオの場面)、歌うとこをがんばった。」</p> <p>C4 「美女と野獣で出てくる順番で、早く出てくるところをがんばります。(この日自分の出番に出遅れた)」</p> <p>C5 「予行の時、自分大きな声出したから、本番もそれですらがんばりたいと思います。」</p> <p>C6 「日本舞踊で、踊りをがんばろうと思ってがんばって、本番もこの調子でがんばって素敵な踊りを見せようと思いました。」</p> <p>C7 「合奏グループで、大勢のお客さんに見せようと思うから、めっちゃがんばろうと思います。」</p> <p>C8 「和太鼓グループで、ドンガドンの所をがんばりたいです。」</p> <p>O児 「和太鼓グループで、今日いっぱい上手にできたから、次も本番みたいにいっぱいがんばりたいと思います。」</p> <p>C9 「合奏で、えっと、はじめのときさ、はじめのシロフォンのとこをがんばります。」</p> <p>C10 「日本舞踊グループの踊りの所を、最初の傘回すところを難しいのでまたがんばってみたいと思います。」</p> <p>② 他クラスの劇や、年中の歌・ハンドベルなどを見て感じたことなど。</p> <p>C11 「あお組の長靴をはいた猫は、猫が出てくるところが面白いなと思いました。」</p> <p>S児 「長靴をはいた猫が、ネズミを食べたところがとっても面白くて、表情もとっても良くて、声も前より大きく出していました。」</p> <p>O児 「なんか、かくれみのをな騙されて盗んだとこで、なんかな、天狗の騙されて残念な表情とかがな、よくできてるなと思いました。」</p> <p>C13 「しろ組のお饅頭ときれいな傘を盗んだところがすごく面白かったです」</p> <p>C7 「わかば組がかちかち山の劇をやるところで、おばあさんとおじいさんが狸に攻撃してうさぎがお返しをしたところが面白かったです。」</p> <p>C9 「スイミーのさいごのところが、なんか面白かったなあって想像できました。」</p> <p>O児 「スイミーの所で、なんかすみれ組さんは年中やのに、表情もちゃんとできて、ぼーっとせず、自分のセリフとか自分の動きとかをちゃんと覚えててできてたからすごいと思いました。」</p> <p>C3 「わかば組のかちかち山で、ためきが燃やされるところが面白かったです。」</p>

エピソード2：5歳児（生活発表会 本番後の「振り返り」）活動

<p>※ 子どもが話した順に記録。</p> <p>① 「生活発表会での自分のがんばったことは？」</p> <p>C1：「合奏の時に、ピアノ弾いてる時に、ママが見て楽しかったです。」</p> <p>C2：「劇の時、『ようこそ』のところが声いっぱいでした。」</p> <p>C3：「劇の時、最後の『なんてことだ』のセリフ、大きく声出しました。」</p> <p>C4：「日本舞踊グループで、『お返しします〜』の時に、見せるところがちょっと難しかったなと思いました。」</p> <p>C5：「練習の時に、外の人の所(町人)で(曲に合わせて)足を踏むところで練習する時になかなかリズムを合わせられなかったけど、発表会の時はリズムを合わせられたです。」</p> <p>C6：「劇で美女と野獣の時に、えっと、声が練習の時は小っちゃかったけど、今では声が大きくなって、お父さんとお母さんに褒められたのが嬉しかったです。」</p> <p>C7：「日本舞踊グループで『お返しします〜』の時、手を通すところをお客さんに見せるのをがんばりました」</p> <p>O児 「和太鼓の時、なんか腕をこうやる時に(ジェスチャーで前に伸ばす)痛かったけど、がんばらなあかんねんと思って、腕を最後まで上げてがんばりました」</p> <p>C9：「落語グループの時、練習では間違えてたところも、本番では間違えなかったから嬉しかったです。」</p> <p>F児 「美女と野獣で野獣する時、なんか花渡すとこ、ちょっとだけ上手になってきたと思います。」</p> <p>② 「他クラスの劇や年中組の演奏などについて思ったことは？」</p> <p>C11：「ハンドベルで年中さんみんな力を合わせて一つにして凄いなあって思って、私もがんばろうと思いました。」</p> <p>C12：「年中とかのクラスも、大きな声を出してたから自分もがんばろうと思いました。」</p> <p>C13：「すみれ組さんとわかば組さんのハンドベルを聞いてたら、きれいだなと思いました。」</p> <p>C14：「わかば組がかちかち山の音がきれいって面白かったです」</p> <p>C15：「すみれ組のスイミーの所で、マグロに食べられるところが面白かったです。」</p> <p>C16：「年中さんのハンドベルの音がきれいで、自分もがんばろうと思いました。」</p> <p>C17：「年中さんのハンドベルで力を合わせてきれいな音を出したのがすごいと思いました。」</p> <p>C18：「ちっちゃい組なのに、ハンドベルの時上から降ろすところ(トレモロ)のところがすごくきれいだった、ちっちゃい子たちなのにがんばってるところがすごいなと思いました。」</p> <p>C19：「ハンドベルの色が紫色が一番きれいかったです。」(音のこと?)</p> <p>C8：「しろ組の天狗の不思議なかくれみの、なんか、天狗が騙されて帰る時に、ちゃんとな表情ができてるなと思ってすごかったです。」</p> <p>C20：「あお組の劇の、長靴をはいた猫で、猫さんが魔王をネズミで食べるところがめっちゃ面白かった。」</p> <p>C1：「あお組の長靴をはいた猫が、ライオンに変身して猫食べられるところが面白かったです。」</p> <p>C2：「しろ組の天狗のかくれみのの、天狗出てきて、人が驚いたところが面白かったです。」</p>
--

内面を支えていることが見て取れる。

④ 他児の様子（がんばり）

他児の様子を観察することは、メタ認知的知識のカテゴリーの「人」の中の「人間の認知特性についての知識（宣言的知識）」の「個人間の認知特性についての知識」に当たる。半数程度の5歳児が他児のがんばりを見出し、例えば、S児は、「長靴をはいた猫が、ネズミを食べたところの表情がとってもよくて前よりも声も大きく出していました。」と「表情」「大きな声」などメタ認知的知識の「方略」を使って観察している。

5歳児では、本番後においても、「最後の『なんてことだ』のセリフ、大きく声出しました（C3児）」のように、練習過程で獲得したメタ認知的知識を使って、本番中にモニタリングやコントロールしたことが見て取れる。練習過程で「振り返り」活動を適宜取り入れたことは、園児自身が意識して課題意識や見通しをもって生活発表会に向き合うことにつながり、結果として自信を獲得している振り返りが多いことも見て取れる。

⑤ 焦点児の「振り返り」活動

焦点児の予行と本番後の振り返り内容の関連について考察する。抽出については、予行と本番後との関連が見取りやすい園児を抽出した。

【F児（6歳5ヶ月）】

予行での振り返りの内容は過去のことだけでなく、未来（本番）へ向けてどうしていきたいかという見通しをもった内容が多い(表3)。振り返りから次への見通しへ

とつながっており、振り返り本来の目的が見えてきている。

F児は、本番後を（図6）のように振り返っている。F児は、予行時の振り返りから、お客さんに見てもらおうという「課題」が分かり、自分の演技をどのように改善すればよいか「方略」として視線や体の向きなどを獲得するとともに、本番への意欲を喚起している。本番後の振り返りでは、「日本舞踊グループ『♪回します〜』の時、(傘をもつ手を回すところを) お客さんに見せるのをがんばりました（筆者の注釈）。」と発言しており、メタ認知的知識を活用して、メタ認知活動であるコントロール（もう少し〜するとよい）、モニタリング（お客さんからみると〜かな）を働かせ、振り返って「回すところが上手にできた」と自己評価していることが見て取れる。

【S児（6歳5ヶ月）】

本番のための予行の場面であることをよく理解し、「明日も（練習を）がんばりたいと思います。」と意欲を喚起している。本番後では、「なんか花渡すところ」が「ちょっとだけ上手になってきたと思う。」のように、自分をモニタリングしたりコントロールしたりしたその過程を意識していることが見て取れる。そして、「ちょっとだけ上手になってきた。」と自己評価している。

練習過程で獲得したメタ認知的知識の方略である「表情」や「声の大きさ」を使って、他児のがんばりをモニタリングしたり、そこから「自分もがんばろう」と目標設定したりするなどのコントロールをしていることが見

エピソード3：焦点児F児（生活発表会 予行・本番後の「振り返り」活動）

F児（6歳5ヶ月）
予行時の振り返り
 「(本番では) お客さんに見てもらって、演技が上手と言ってほしかったから、(練習を) がんばって、(そんな) 自分がすごかったと思いました。」 * () 筆者が補足
 ↓
本番後の振り返り
 「日本舞踊グループで『♪回します〜』の時、お客さんに見せるのをがんばりました。」

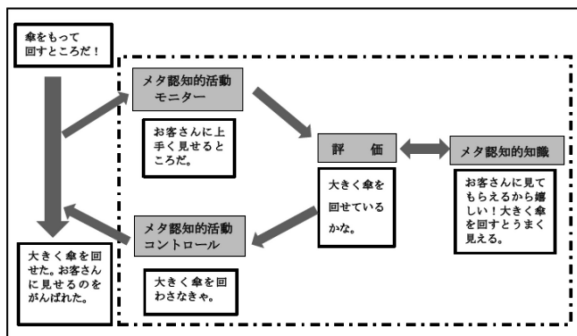


図6 F児 メタ認知のモデル図

エピソード4：焦点児S児（生活発表会 予行・本番後の「振り返り」活動）

S児（6歳5ヶ月）
予行時の振り返り
 「いつもやっている『美女と野獣』の劇で（本番で）お客さんに見てもらえるので嬉しいと思います。明日も（練習を）がんばりたいと思います。」
 「あお組の『長靴をはいた猫』は、ネズミを食べたところがとっても面白くて、表情もとってもよくて声も前よりも大きく出していました。」
 ↓
本番後の振り返り
 「『美女と野獣』をする時、なんか花を渡すところ、ちょっとだけ上手になってきたと思います。」
 「年中さんのハンドベルの音がきれいで、自分もがんばろうと思いました。」

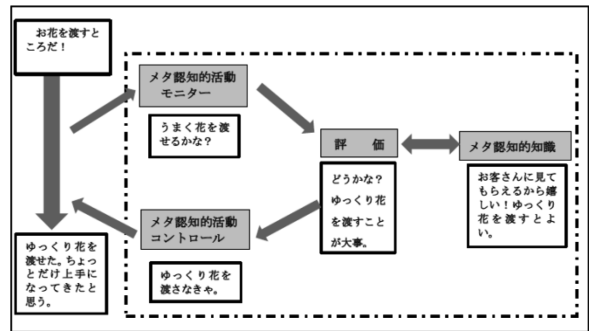


図7 S児 メタ認知のモデル図

で取れる（図7）。

【O児（6歳7ヶ月）】

予行で「いっぱい上手にできた。」と自分をモニタリングし、明日（次）への意欲を喚起している。実際、O児は目的意識をもって練習に取り組んでいた。本番後の振り返りでは「痛かったけど、がんばらなあかんねんなんて思って、腕を最後まで上げてがんばりました。」と演技中の自分の行為等をこれまでの練習過程で獲得してきたメタ認知的知識の課題や方略を使ってモニタリングし、コ

ントロールしたことをO児自身が自覚していることが見て取れる。

他児のがんばりについても「表情」「自分の動き」「覚える」などの観点をもって観察・評価している。これも練習過程で、教師等からのことばかけ（外言）により獲得したメタ認知的知識が園児に内面化されていることが見て取れる。これまでの経験がメタ認知的知識となって蓄積され、それらを使ってメタ認知的活動が働いていると考えられる（図8）。

エピソード5：焦点児O児（生活発表会 予行・本番後の「振り返り」活動）

O児（6歳7ヶ月）
予行時の振り返り
 「ぼくは和太鼓グループで、今日いっぱいできたから、次（明日）も本番みたいにいっぱいがんばりたいと思います。」
 「年中組の『スイミー』の劇で、年中やのに表情もちゃんと出て、ぼーっとせず、自分のせりふとか、自分の動きとかをちゃんと覚えてできていたからすごいと思いました。」
 ↓
本番後の振り返り
 「和太鼓の時、なんか腕をこうやるときに（ジェスチャーで前に伸ばす）痛かったけどがんばらなあかんねんあと思って、腕を最後まで上げてがんばりました。」
 「しろ組の天狗の不思議なかくれみの、なんか、天狗がだまされて帰るときに、ちゃんと表情がでてきてるなと思ってすごかったです。」

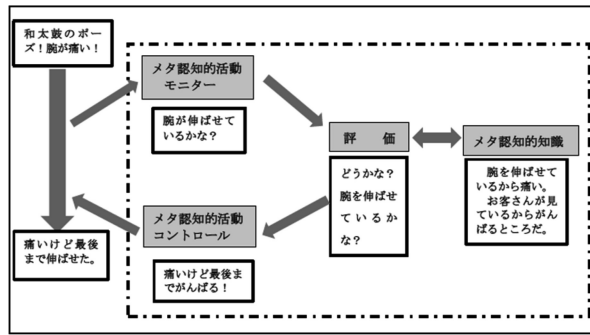


図8 O児 メタ認知のモデル図

(2) 本調査の結果と考察：4歳児（エピソード6、表4）

① 予行場面での振り返り

4歳児は、5歳児と比べると、本番前の予行という場面を意識しているかについては、発言からの判断だけでは見取りにくい。また、次ががんばること、すなわち課題を見出せているかについても同様に見取りにくい。メタ認知的知識である「他児のがんばり」についても見取れなかった。これらは、自分が表現（演じる）することに満足な状態であると判断する。4歳児においては、自分が「楽しかった」「面白かった」という経験は、記憶力やことばの発達に伴い、たやすく振り返ることが見て取れる。ただ、「楽しかった」「面白かった」という経験は振り返りやすいが、それで終わってしまいがちである。一方、この時期から見られ出す「悔しかった」「残念だった」という経験は、「だから～したい」というメタ認知的活動を促すことにつながると言える。

4歳児では、少しずつ「悔しかった」「残念だった」という振り返りを取り上げてきたので、M児のように「大きな声で言えなかったのが悔しかった」が見られるようになった。

M児は、とても悔しそうな表情で話した。自分の行為をモニタリングして「大きな声で言えなかった。」と振り返った。メタ認知的知識の「方略」として「劇遊びのときは大きな声を出すことは大切なことである。」を、さらにメタ認知的知識の「人」として、「いつも自分は大きな声を出すことができている。」をもっていると見取れる。

発言には現れていないが、M児には「本当はもっと大きな声が出せるのに。」したがって「今度こそ大きな声を出したい。」というメタ認知的活動のコントロールの働きが見て取れるのである。

このように、「悔しい」「残念だった」という経験を振り返ることは、メタ認知の効能として、次への「前向きな気持ち」を促すことが見て取れる。

T児は、「うれしかった、あのな、ばあさん役で出るところが恥ずかしかった」と振り返った。T児の「恥ずかしかった。」では、4歳児ならではの他者の視線を意識し、見られている自分、でも、メタ認知的知識である「嬉しい」と思う自分の気持ちを使って、メタ認知的活動のモニタリングやコントロールをしながら、ばあさん役を演じていることが見て取れる。

② 本番後の振り返り

4歳児は、他児と少しでも違うことを発言したいがため、他児の発言をよく聞くようになってくる。しかし、5歳児で見られるように、他児の発言に質問したり補足したりする姿はまだ見られない。

また、5歳児で見られた予行と本番との振り返りの関連は見られない。M児は、予行では「大きな声で言えなかったのが悔しかった。」と振り返っていたが、本番後は、「パパとママにビデオをとられたのが嬉しかった。」と発言しており、大きな声を出せなかった悔しい経験より、嬉しい経験の方が振り返りの対象としては優位であることが見て取れる。T児（4歳11ヶ月）の場合も、予行では劇遊びについて振り返っていたが、本番後は楽器

表4 生活発表会予行の「振り返り」活動 4歳児

評価項目		予行を意識する	課題を見出す	意欲を喚起する	他児のがんばりを見出す
園児	年齢	①	②	③	④
C1	5歳8ヶ月			声をだしたところが楽しかった。	
C2	5歳6ヶ月			ハンドベルが楽しかった。	
C3	5歳1ヶ月			あちちいたが面白かった。	
M児	4歳11ヶ月			大きい声で言えなかったのが悔しかった。	*
T児	4歳11ヶ月			嬉しかった ばあさん役ででてくるところが恥ずかしかった。	*

* 焦点児

エピソード6：生活発表会本番後の「振り返り」活動 4歳児

C1	お祖父ちゃんとお姉ちゃんとママとパパが来てくれたからよかった。
C2	楽しかった。あのな、お足ビシッとしてなあ、足（音）聞こえへんにならないようにジャンプしたウサギ役
C3	楽しかった。たんぼ組（2歳児）とかに見てくれるのが感動した。
C4	楽しかった。歌と振り付けと一緒にやるのが。（身体表現する）後、皆に見られているのが緊張した。
C5	楽しかった。（劇の）全部を見て（い）たら、かちかち山の全部（自分たちの劇）を見ていたら感動しました。
C6	…あのね、木（薪）のね、背負うところが楽しかった。
M児	あのなあ、ママとパパにビデオをとられたのが嬉しかった。
C7	プログラム言ううた（紹介）のが楽しかった。
C8	…（考える様子）お祖父ちゃんお祖母ちゃん二人いて、お父さんお母さんゆりちゃん（妹）いっぱい来てくれて、ちょっと緊張して、ハンドベルも難しかった。
C9	楽しかった。皆にな、見られてな、緊張してな、でもがんばった。
C10	ママとパパがビデオな、二人な、ママにビデオを撮ってもらったからな、ちょっと緊張した、かちかち山のな、ウサギのところな、出たらな、ちょっと緊張した。
C11	楽しかった。海のところの「うわあ！助けてくれ！」のところが面白かった。
C12	お母さんとかずきちゃん（弟）とおばあちゃんが来てくれて嬉しかった。
H児	楽しかった…。
C13	ママとパパとお兄ちゃんが来てくれて嬉しかった。
C14	たっくん兄ちゃんとお母さんが来てくれて嬉しかった。
C15	楽しかった。ハンドベルのトレモロ（をがんばった）
O児	ハンドベルの間違えちゃったところが難しかったです。
C16	楽しかった。お母さんとお姉ちゃんが来てくれて嬉しかったです。
T児	楽しかった。あのハンドベルがもっと簡単にできることが嬉しかったです。で、レのすぐできるところ、トレモロが難しかった。
C17	楽しかった。ウサギの「カチカチカチ」（火をつけるところ）が楽しかった。
R児	悔しかった。かちかち山するときに、皆に見られて声でなかったことが悔しかったです。
C18	楽しかった。「畑仕事に言ってくる」（お爺さん役）のところが楽しかった。
C19	楽しかった。ママとパパがビデオを撮ってくれたことが楽しかった。感動した。
C20	楽しかった。ハンドベルのね、ドがな、楽しかった、シも！
C21	楽しかった。ハンドベルのトレモロと普通のやつ、二つしたのが楽しかった。

演奏のことを振り返っている。しかし、その内容には広がりや深まりが見られる。例えば、「楽しかった、あのハンドベルがもっと簡単にできることが嬉しかったです。で、レのすぐできるところ、トレモロが難しかった（T児）。」の振り返りからは、ハンドベル演奏を難しいと思っていた過去の自分と、簡単にできると思っている現在の自分の気持ちの変容に気づき、喜びを感じている。と同時に、難しかったトレモロに対して新たな課題と意識している。これは、心の理論が成立し、過去の自分が抱いていた感情と、今の自分の感情とを区別して捉えることができるようになってきていることと関連しており、メタ認知的知識の「人」に変化が出てくる時期とも関連があると想定される。

これが5歳児を目前にした4歳児の姿であり、「悔しい」経験を振り返る姿が少しずつ増えてくる。例えば、「ハンドベルの間違えちゃったところが難しかった（O児）。」「悔しかった、かちかち山するときに皆に見られて声が出なかったことが悔しかった（R児）。」などである。人前で話すことが苦手であったH児（5歳11ヶ月）は、劇遊びで大きな声で表現できる姿が増えてきた。しかし、一人で話す場面になると無言になりがちであるが、

「楽しかった…」と振り返っている。これは、「苦手を克服して大きな声で言えるようになった」自分の変容を自覚できたからではなからうか。

このように、4歳児では、メタ認知的知識が増えることから、メタ認知的活動であるモニタリングやコントロールもようやく見て取れるようになってきている。

(3) 本調査の結果と考察：3歳児

3歳児では、本番の実施後に、生活発表会での自分や他児を振り返ることをねらいとして実施した。教師は、主要発問として「発表会でお家の人にどんなことを誉めてもらったのかな？」を投げかけた。

T：「お家の人にどんなことを誉めてもらったのかな？」

C1：「上手やって言われた。」という表現が4名程度続き、振り返りに行き詰る。

T：「何が上手って言われたの？」

C2：「劇が上手って言われた。」

C3：「お歌がすごいって言われた。」

M児：「声が大きかったって言われた。」

3歳児にとって、前日の発表会なので記憶は新しいは

ずであるが、劇遊びを存分に楽しみ、お家の人に来てくれたことで「楽しかった」「嬉しかった」で終わることを予想していたため、教師は、他者（お家の人）から誉めてもらったことについて対話により振り返りを促すことにした。しかし、M児のような反応、「声が大きかったって言われた。」が一例のみであった。

このことから、3歳児の段階では、4歳児のように「楽しかったこと」からメタ認知を促す段階に至らないことが分かる。他者（お家）からの評価も、3歳児段階では、励ましの主となることで十分なのであろう。

今後の年長者（親・教師）の関わりとして、M児の振り返り「声が大きかったからよかった。」のように、具体的に誉めることがメタ認知を促すために大切であろうと思われる。

IV 総合考察

1 幼児期における「振り返り」活動

教師との対話により、3歳児でも簡単な振り返りはできた。4歳児、5歳児になるにつれて、振り返りの内容に変容が見られるようになった。心の理論が成立する4歳を境に、他児との関わりからメタ認知的知識を獲得する姿が増えて、5歳児になると、子ども同士で、振り返りを深めたり広げたりする姿が見られるようになった。生活発表会のように繰り返しの中で創り上げていく協同的な活動の重要性も見出せた。

3歳児では、誰かに話したい気持ちから「嬉しかった」「楽しかった」経験の振り返りが始まる。ことばと身体表現（ジェスチャー）を使って表現する楽しさを存分に味わう大切な時期である。同時に教師との対話による（外言）から、メタ認知的知識を蓄えていく段階とも言える。「何が楽しかったの？」「どれが上手にできたの？」を内面化することから、「すべり台、しゅうつが楽しかった。」と表現するようになる。

4歳児では、時間軸が広がり、ことばや記憶の発達に伴い、振り返りに広がりや深まりが見られるようになる。また、心の理論の成立により、過去の自分と今の自分の感情の区別ができるようになるため、「悔しかった。」「できなかった。」という経験を取り出すことができ、メタ認知的知識が増えるにつれて、「だから次に、～したい。」というメタ認知的活動が表れ出す。ここでは、「悔しかった」気持ちを受け止める教師との対話により「だから～したい。」へと導いていくことが重要である（エピソード6）。

5歳児では、振り返りから次への見通しをもつ姿が見られるようになる。例えば、O児「ぼくは和太鼓グループで、今日いっぱい上手にできたから、次も本番みたい

にいっぱいがんばりたいです。」である。小学校では、今日の学習を振り返る段階から次の学習への見通しをもつ段階へと進むが、5歳児においても同様に、振り返りの経験を積み重ねることにより、やがて次への見通しへとつながることが分かる。ここでは、教師は小学校以降でいう「発問」を意識して、「そうだね、上手にできるようになったね。」「例えば、どんなことかな。」と問い返すような対話が求められる。この対話により、「方略」が外言化により意識化を図ることができるからである。

2 教師の果たす役割

幼児期における「振り返り」活動では、「嬉しかった」「楽しかった」時には「悔しかった」という情意面から振り返りが始まってくる。そこに伝えたい相手（教師や友だち）がいて受け止めてくれる存在がいるので「振り返り」活動が楽しくなる。このような経験を通して、メタ認知的知識が蓄積され、同時にメタ認知的活動が促される段階に至る（図9）。

幼児期における「振り返り」活動は、教師との対話により始まり、促されていくと言える。メタ認知の発達を促すための教師の役割の一つに対話がある。予備調査の考察で教師の関わり（発問）を挙げているが、発問が「どうだった？」と漠然としている場合、振り返りは想起のみで終わることが見出している（表1）。一方、5歳児の振り返りからは、教師がこれまで発問してきた「声の大きさはどうか」「表情はどうか」などを使って振り返っている姿が見られている（エピソード5）。

この際、どのようにメタ認知的知識を獲得するかが重要である。「メタ認知的知識の注入」に陥らないために、鍵となるのが協同性である。遊びの中での気づきを、協同的な学びとして、「振り返り」活動により自覚化を図

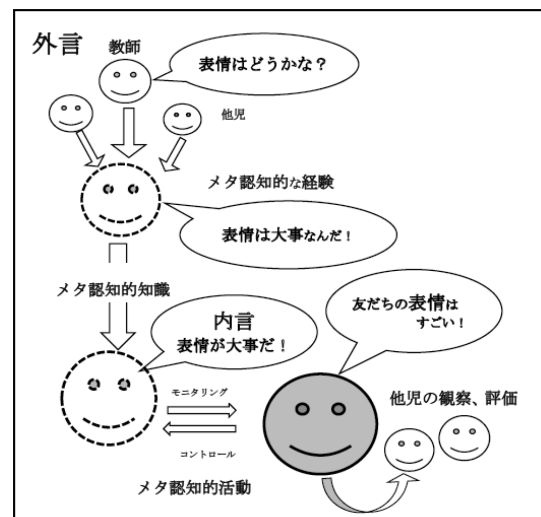


図9 協同的な場面でのメタ認知的活動

ることが重要なのである。教師の役割の二つ目が「協同性」を意識することである。4歳児になると他児の話を意識して聞き取り、少しでも違うことを話そうとする姿が見られる(エピソード6)。これは協同的な学びの始まりであると言える。さらに5歳児になると、友だちとの関わりがより活発になり、「振り返り」活動では、子どもたち同士で振り返りを深めたり広げたりする姿が見られるようになった(エピソード2)。

同時に、次への見通しを見出す姿も見られるようになる(焦点児S児)。小学校以降で展開される学び合いの始まりである。4歳児後半から5歳児にかけて、「悔しかった」「うまくできなかった」ことを振り返り出すが、これは問題解決の始まりとも言える。「振り返り」活動の必要性を感じられやすく、幼児のメタ認知の発達をより促進するとも言える。

3 仮説に対する考察(表5)

先行研究並びに予備調査にもとづき、幼児期におけるメタ認知の発達についての仮説(表2)を踏まえ、本調査でのエピソード分析を行った。

幼児期における「振り返り」活動は、メタ認知的知識をモニタリングすることから始まる。3歳児は、「ゾウがいた」と想起する段階から始まるが、やがて情意面を伴う「ママが来てくれてうれしかった」「お歌が上手って言われた」へと振り返りの内容が少しずつ変化してくる。4歳児になるとメタ認知的知識の内容が変化し始め、「楽しかった」から「もっとしたい」「できなくて悔しかった」などモニタリングで終わらず、コントロールにつながる振り返りが見られるようになる(エピソード6)。

5歳児になると、教師との対話や他児との協同的な活

動によりメタ認知的知識が蓄積される姿が見取れる。と同時にメタ認知的活動のコントロールも見取れるようになる。困難な場面で自分がどのようにして乗り越えたかを自覚し始める姿も見られるようになっている(図8)。

このように、「振り返り」活動を体験するにつれて、ただ想起する段階から、情意面を伴う「嬉しかったこと」「楽しかったこと」を、さらに「できたこと」だけでなく「できなかったこと」「失敗したこと」に気づくようになり、それを乗り越えようとする前向きな発言も見られるようになる。

幼児期におけるメタ認知の発達を、「振り返り」活動のエピソードから考察していくと、メタ認知の芽生えは3歳児、4歳児から見られ出し、5歳児では確かなメタ認知の芽生えを見取ることができると考えている。

V おわりに

本論文の最終目的は、幼小接続期の教育の連続性・一貫性について、知見を得ることである。本論文では、ある特定の幼稚園における「振り返り」活動のエピソードを取り上げているが、そのエピソードに見られる振り返りは、どの幼稚園でも見られる一般的な姿であると受け止めてよいであろう。

すなわち、本論文のねらいは、メタ認知の発達という視点をもって、幼児期の子どもの姿を捉えることの重要性を確認することである。と同時に、メタ認知の芽生えや促進する教師の関わり的重要性を見出すことにもある。

幼児期では、家庭や幼稚園生活などでのインフォーマルな学びが中心である。やがて、小学校以降の教科等におけるフォーマルな学習へとシフトする。このシフトが

表5 総合考察(幼児期におけるメタ認知の発達)

「振り返り」活動						
歳児	メタ認知的知識			メタ認知的活動		促進のためのキーワード
	人	時間的対象	情意面	モニタリング	コントロール	
3	自分	直近	楽しかったこと	…	—	対話的な関わり
4	自分 他者	数日の前後	+悔しかったこと	△	…	対話的な関わり 協同的な活動
5	自分 他者	十数日の前後	+困難なこと	○	△	対話的な関わり 協同的な活動

*注釈 「—」: 全く見とれない状態
 「…」: 教師との対話によりやや見取れる状態
 「△」: 教師との対話により見取れる状態
 「○」: 教師との対話や協同的な活動により見取れる状態

幼小接続期に当たる。学びの主人公である子どもの内面に焦点を当てたとき、既に芽生え始めたメタ認知が主体的な学びを支える役割を担っており、学びの連続性・一貫性が生じていると言えるのではなかろうか。

日々の遊び(学習)の中で、教師の対話的な関わり(発問)によりメタ認知の発達を促すとともに、協同的な活動(学習)を振り返るという意図的な場を設けることにより、「気づき」を共有したり、深めたりする創造的な学び(学習)へと展開する、これが幼小接続期の教育に共通する営みである。(注:()は教科教育を意味する。)

そのために、幼児期における教育では、まず、子どもの「気づきを伝えたい」という思いを「振り返り」活動の中で十分に発揮させることを意識したい。やがて「他者の気づきも聴きたい」へとつながり、学びの基礎を培うことになるのである。

今、教育は大きな変革期にあり、就学前から含めたすべての教育段階において求められる資質・能力を意図的に育成する教育の在り方が要請されている。OECD教育研究革新センターからの報告書(2015)では、メタ認知を取り入れた教授法は、就学前教育、初等中等教育、高等教育、すべての教育段階を通じて効果的であると指摘されている。さらに、特筆すべきこととして、メタ認知を取り入れた教授法は、協同学習においてより効果的であることが報告されており、本論文で得た知見と重なりと受け止めている。

最後に、教師の意識変容の重要性について述べたい。フィールドとなった幼稚園の教師には、「振り返り」活動を取り入れることにより大きな意識変容があった。「これまでは振り返ることは、単に復習したり覚えたりするための行為だと思っていた」「振り返りは大人がすること、子どもがこんなにはできるとは思わなかった」「子どもの発言をこれまで以上に興味深く聞き取るようになった」、さらに「子どもの振り返りを深めるために、もっと指導力を高めたいと痛感した」などの気づきが語られた。教師の意識変容も幼小接続期の教育についての貴重な知見の一つとなり得るのではないかと考えている。

今後は、本論文のキーワード、「対話」、「協同性」により「振り返り」活動に広がりや深まりが見られるエピソードを収集・分析し、メタ認知の発達を促す具体的な指導方法について研究を深めたい。また、心の理論が成り立つ4・5歳児から小学1年生の算数学習までを視野に、メタ認知との関連から幼小接続期の教育の連続性・一貫性について知見も得たい。

<参考・引用文献>

藤谷智子(2011). 幼児期におけるメタ認知の発達と支援 武庫

川女子大紀要, 59 31-42.

J・ダンロスキー+J・メトカルフェ著(2014)『メタ認知基礎と応用』(湯川良三+金城光+清水寛之訳)北大路書房 pp.222-229.

板倉昭二(2008). メタ認知は人間にのみ固有な現象か 丸野俊一(編)【内なる目】としてのメタ認知 現代エスプリ 12 至文堂 pp.29-37.

国立教育政策研究所教育課程研究センター(2013). 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則【教育課程編成に関する基礎的研究 報告書5】

丸野俊一・堀憲一郎・生田淳一(2002). ディスカッション過程での論証方略法とメタ認知的発話の分析, 九州大学心理学研究, 3 pp.1-19.

丸野俊一(編)(2008). 【内なる目】としてのメタ認知 現代のエスプリ 12 至文堂

文部科学省(2008). 小学校学習指導要領総則 解説

文部科学省(2008). 幼稚園教育要領

文部科学省(2017). 小学校学習指導要領

文部科学省(2017). 幼稚園教育要領

OECD教育研究革新センター(2015)『メタ認知の教育学 生きる力を育む創造的数学力』(篠原真子, 篠原康正, 巖岩晶訳) 明石書店

太田友子(2013). 堺市立深井小学校研究集録(2010~2013). 考えぬく力を育てる算数指導

岡本夏木(1985). ことばと発達 岩波書店

三宮真智子(編)(2008). メタ認知 学習力を支える高次認知機能 北大路書房

重松敬一・勝美芳雄(2008). 算数教育とメタ認知 丸野俊一(編)【内なる目】としてのメタ認知 現代エスプリ 127 至文堂 pp.202-212.

重松敬一監修(2013). 算数の授業で「メタ認知」を育てよう 日本文教出版

内田伸子(2008). 文章産出過程でのメタ認知の働き 丸野俊一(編)【内なる目】としてのメタ認知 現代エスプリ 12 至文堂 pp.78-87.

内田伸子(2014). 乳幼児の論理的思考の発達に関する研究-自発的活動としての遊びを通して論理的思考力が育まれる- 保育科学研究, 第5巻 pp.131-141.

ヴィゴツキー著(2001). 『思考と言語』(柴田義松訳) 新読書社.

ヴィゴツキー著(2003). 『「発達」の最近接領域」の理論-教授・学習過程における子どもの発達-』(土井捷三・神谷栄司訳) 三学出版

謝辞

論文作成に当たり、エピソード収集・分析にご協力いただきました。城南学園幼稚園の毛受葉月先生をはじめ先生方に深く感謝申し上げます。

“Reflection” Activity in Early Childhood : A Study Concerning Metacognition in Connection Period Between Kindergarten and Elementary School

Tomoko Ota

Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

Metacognition is “cognition about cognition”, but it is thought that meta-recognition is indicated as one of the qualities and abilities that should be trained in the next course of study for elementary school and how to train is an important issue.

In this thesis, in order to obtain knowledge about the continuity and consistency of education in the early childhood, regarding the “reflection” activity being conducted in elementary school and after learning, we conducted an episode analysis for the child’s remarks there.

As a result, in addition to grasping the seedling of metacognition in early childhood, I was able to find out the importance of dialogue and cooperative activities with kindergarten teacher who promote metacognition.

Key words : metacognition, reflection, theory of mind, dialogue with kindergarten teacher, cooperative activities, connection period between kindergarten and elementary school

